東文化祭 37

高校阿倍野新聞

発行所
大阪市阿倍野区阪南町一丁目30番34号
大阪府立阿倍野高校
新聞部
編集責任　石橋奈佳
発行責任　高萩治子

一面　文化祭
二～三面　特集　〝信楽焼〟
四面　新聞部座談会

積極参加期待
しらけるな、文化祭

〝燃やせ・青春！時は二度と戻らない〟をスローガンに、第三十七回文化祭が行われる。今年は、リサイクルを目的に、ここ数年行われていなかった、バザーが催されている。

六日と七日にかけて、第三十七回文化祭が開催されている。

今年の文化部会は、五月の中旬に発足し、準備期間が十分だったとは言えなかった。

六月二十日に議会に提出され、即、承認された『文化祭基本方針案』も、部会の中で十分討議することが出来なかった。

昨年の文化部会は、顧問が生徒に任せきりであったため、文化部長を中心とした部会メンバーで、準備が進められた。

しかし、今年の部会の進行状況はひどいものであった。放送、黒板、メモなどを利用し、十分連絡しているにも関らず、部会のメンバーは揃わない。毎回数人、ひどい時には、顧問と部長の二人きりで仕事をするといった状態であった。一部放送の聞こえない教室などもあるが、あまりにも消極的すぎたのではないだろうか。

今年は、校舎改築工事のため、第一グラウンドを使うことが出来ない。そのため、模擬店のテントを張る場所、不用な机などを置く場所がなくなってしまった。そこで部会は、本館の前のコンクリートの道に、実際にテントを張ってみて、模擬店が開けるかどうかを確めるなど、苦労した。

また、文化祭を前に、執行部のメンバーも、他校の文化祭を見学して、今後の参考にしようという計画を立てたり、都会や委員会に出席したりと、頑張っていた。

次に、文化祭予算の内分けであるが、クラブ援助費三十万円、クラス援助費二十八万円、プログラム費四万円、アーチ費五万円、後夜祭費二万五千円、事務諸費三万五千円となっている。

会計面においては、昨年と同様チケット制が採用された。

バザーのチケットも、模擬店のと似ており、まず、買いたい商品のお金をチケット売場で払い、その商品の券をもらう。そして、目的の店で、その券の商品と交換してもらうのだ。他にバザーの店を全部同じ階に集め、その近くにチケット売場を置くなど、お客が店からチケット売り場へ行くのに手間取らないように工夫されている。

また、模擬店の売り上げの黒字分は、福祉に寄附される予定である。

集会部会主催の後夜祭は、七日の文化祭終了後、体育大会、文化祭の二大行事の締めくくりとして行われる。内容は、昨年と同様、グループ対抗かくし芸大会と、一般公募の二つ、そして、フォークダンスである。

グループ対抗は、体育大会の時の各団から、先生、生徒の代表が、それぞれ出場し、かくし芸を披露する。一般参加も、四組集まっており、先生方の飛び入りも期待される。

フォークダンスも、昨年と同様『マイム・マイム』を踊る。『オクラホマ・ミキサー』を希望する生徒も多いと思うのだが、『オクラホマ・ミキサー』だと、整列しにくい、ペアを組みにくいなどの理由で、無理だそうだ。

また、今年は、ファイヤーストームの点火に工夫が凝らされているらしいが、集会部会顧問は「乞う御期待」とだけで、当日、見てのお楽しみである。

陶芸祭りが催されており、カラオケ大会などで、とてもにぎわっていました。

いろいろな事がありましたが、様々な人々のおかげで、良い取材をすることができました。

取材の結果報告と、新聞部に関するいろいろな事を、三年六組と三年七組で展示しております。

ご近所お誘い合わせの上、そろってお越し下さい。お待ちしています。

文化祭出し物
～クラブ＋有志～

第三十七回阿倍野高校文化祭のクラブ参加数は十四、有志参加数は五で、十月六日、七日の両日、様々に催されています。よき思い出の文化祭となる様、後の紹介を参考にして十二分に楽しんで下さい。

☆舞台関係クラブ

○軽音エレキ班
皆様お誘い合わせのうえ聞きにいらして下さいませ。

○軽音フォーク班
L・MUSIC CONCERT in旧講堂

○演劇部
あの美しい旧講堂で〝不思議の国のアリス〟をやります。

○ブラスバンド部
美しいサウンドをあなたに贈ります。新入部員求む！

○音楽部
かろやかな音色にあなたとともに青春を燃やそう！

☆展示関係クラブ

○映画研究部
僕達の期待をよそに映写機がまわり始めた。

○放送部
イントロクイズに挑戦！3の2でやってますっ。

○写真部
やるから来てな！

○アマチュア無線部
今年はミニFMを予定しています。どうか来てね！

○華道部
合作と個人で生けました。見に来て下さいね。

○文学部
新聞部と一緒にしないでネ！文学部頑張りました!!

○新聞部
今年の研修旅行は、〝伝統工芸と町の現状による今後の見通し〟をテーマに、滋賀県の有名な伝統工芸、信楽焼の故郷、甲賀郡信楽町に行ってきました。

少し、山奥の方にあり、田舎でしたが、町の人々はとても温かでした。宿泊先の玉桂寺の人々も、とても親切で、一日の取材の疲れをゆっくり落とすことができました。

二日目の夜には、信楽焼の窯元の方々の御厚意で、ろくろ体験をさせて頂きました。

☆有志参加

○FUCK OFF、SAINTED MOTHER
○クール＆エキサイティング史上最高のバンドでっせ！

（㊙）CHAN・スペス
○下手だけれど、がんばりますので、聞いて下さい。

LNEN－BAND
尚、都合により一部のクラブ、有志グループを割合させて頂きましたことを、深くお詫びいたします。

部説
時間を有効に
長びく朝の集会

本校では毎月一回、月曜日に朝礼が開かれている。しかし最近、その実施方法に問題があるのではないだろうか。

朝礼の実施方法についての第一の問題は〝時間が長い〟ということである。本来朝礼は、〝教師が生徒の状況を把握し、全校統一の連絡をする場〟である。そのため、各委員会・部会からの連絡や生徒課からの諸注意が時間の大半を占めている。その上、一カ月のうちに起こった事や、風紀の乱れについての話などもあるので、かなり時間が延びる。これらを良くするには、〝各委員会・部会からの連絡を、休み時間に放送・掲示板などで行う〟〝先生が注意などに使う時間をあらかじめ決めておく〟などが考えられる。

ところで、朝礼の時間が延びて、授業が一時間ずつずれることがある。これは生徒にとって、最も嫌な事であろう。これを少しでも減らすためには、〝朝礼の回数を増やす〟〝学年ごとの集会を行う〟などの方法をとればよいのではないだろうか。朝礼の回数が増えれば、一回一回の時間が短縮され、生徒も気を引き締めるであろう。そうすれば、諸先生方の話を聞く体勢が整うのではないだろうか。その他〝朝礼のある日だけ登校時間を早くする〟なども考えられる。

ところで、朝礼では先生方からの話がほとんどである。だが、自治会会長や、各部会の部長などからの話があってもよいのではないだろうか。生徒が、自治会や各部会の活動に対して無関心なのは、生徒がそれらの活動内容について、よく知らないせいだと思われる。それならば、全校生徒が集合する朝礼で、活動内容などの話をすればよいのではないだろうか。

うすれば、自治会や各部会に関する事を生徒に知らせることができ、そういった活動に少しは積極性が出るだろうと思われる。

また集合状態については、〝出入口が狭い〟〝場所が第一グラウンドから第二グラウンドへ移動した〟などの理由で、以前よりもかなり悪くなっている。しかし、これは生徒一人一人が気を付ければ済むことである。校舎改築は前々から行われているのだから、先生方から注意される前に自己の判断で行動するべきである。

前述したように、現在の朝礼は長時間である。だが本当に必要なことだけを簡潔に話し、生徒がもっと気を付ければ朝礼はもっと短くなるであろう。時間があるからといって、あるだけ使うなら、朝礼の意味は全くないのではないだろうか。

◇　◇　◇

針小棒

昼休みによく、部会や委員会などの連絡が、校内で放送される。事務室前の黒板など校内放送以外の連絡方法があるにも関らずである。役員ではない一般生徒は、この放送を聞いていて嫌になってくる▼これらの校内放送は、本当に、校内にだけ流れているのだろうか。五時限目に体育の授業があるクラスにはわかるだろうが、校外にも流れている▼もし、自分の家の前に高校が建っていて、五十分おきに騒音が発せられたら精神状態はどのようになるだろうか。もちろん一日中家にいての話である▼私の家の場合にだったら、どうなっているだろう。初めのうちは、軽く聞き流せるかもしれない。高校だからという理由でだ。しかし、校内放送の内容をよく聞いているうちに、軽くも聞き流せなくなってしまうだろう。遂には、学校に、苦情を申し出ると思う。誰でも、自分の生活環境を騒音で汚して欲しくはないはずだ▼我が校には、以前から、校内放送についての苦情があったと聞いている。周辺民家から苦情がある以上、我々は、改善して行かなければいけない▼急な呼び出しなどは仕方がないことである。しかし、予定がわかっていることや、朝から連絡できることは、校内放送がなくても充分に伝わるはずである。時間割変更を伝える黒板には注意深い阿倍高生のことであるから▼校内放送の件数を減らすことは、周辺民家のためだけではないのである。一般生徒への影響もかなり大きいはずである。昼休みは、お弁当を食べていて、一日で一番気分的に落ち着いた時間である。そのような時に、先生の声が、スピーカーから流れてくるのは良いものではない。

（綾針）

焼物の名産地

信楽焼と信楽町

今や焼き物で〝狸〟といえば『信楽焼』と、たいていの人は連想するだろう。

我々新聞部は、今回の特集テーマを「伝統工芸と町の現状による今後の見通し」として、信楽の後継者問題や、観光客の集め方の工夫など、色々知るため、滋賀県甲賀郡信楽町を訪れた。

信楽町は、滋賀県の最南にあって、京都府・三重県に接し、自然と爽やかに澄んだ大気に富む標高三〇〇メートル前後の高原性地帯である。

今から一二〇〇年の昔、かの聖武天皇が紫香楽宮の造営に際し、軒丸瓦や什器（日常使う家具類）の須恵器を焼かれたことに現在の『信楽焼』が始まった。その後、水がめ・茶つぼ・茶器・徳利・火鉢など、大物から小物に至るまで、多くの製品を通じて、〝手作りの味を感じる伝統の工芸品…〟と、人々に広く共感を抱き、今日に致っている。また、現在見かける『信楽焼』は、平安時代末期から作られ、鎌倉時代～室町時代頃の製品を特に、〝古信楽〟と呼んでいる。

では、信楽焼が作られる手順はどうかというと、信楽独特の（どんな焼き物にも使用できるという良質の）粘土を用いて作られる。この粘土で形を作り、乾燥させる。続いて、それの素焼き（うわ薬をかけないで、低温で焼くこと）をして、次に最終的な本焼きをして完成する、ということである。

また、『信楽焼』を生産している信楽町は、明治時代～昭和にかけて、火鉢の生産の研究が進み、全国需要の90％を占めた。その他、現在では植木鉢、タイルなどの建築材料の多量生産が行われている。

しかし、焼き物を作り、昔からの伝統を残していくには、『信楽焼』を受け継ぐ、いわば後継者が重要になってくる。そのためには、数多くの配備が成されているが、その一例として、滋賀県立甲南高校信楽分校窯業科・デザイン科などで、次代の『信楽焼』を担う人達が育成されている。

でも、信楽は焼き物ばかりでなく、さらに一二〇〇年の昔、嵯峨天皇の御代が岩谷山（現在の仙禅寺一円）に茶の実を植えられたのを起源に、茶もまた広がり、これが茶器や茶つぼを作るきっかけとなり、今や焼き物とお茶の香り漂う信楽、とも言われている。

以上、信楽町と『信楽焼』についての大まかな事柄を説明したのだが、もっと詳しい内容は、この特集記事をどうぞ…。

人材確保が必要

信楽焼振興協議会

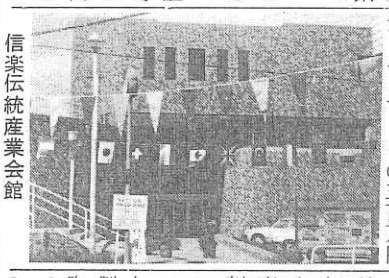
信楽焼の売り上げ、振興状態を知るために、滋賀県甲賀郡信楽町の信楽伝統産業会館内にある信楽焼振興協議会を訪れた。

この振興協議会の他に、国際家具見本市、服部緑地公園で行われた全国緑化フェア、毎年開催されている全国産地グランドフェアにも信楽焼を出品している。

振興協議会の仕事はというと、まず、技術開発、もう一つは販路開発、労働というものに対して、業界がどういうふうにやっていくか、労働者の対応など、振興策については多種多様にわたっている。これらをいかに対処していくかということを皆で相談するのである。信楽焼の場合は大きいものから小さいものまで、どんなものでもできて、特色はわりに少ない。昭和五十年程度では、植木鉢が生産高の約半分、タイルが二割弱、現在では、植木鉢が30パーセント程度減少、タイルが30パーセント程度増加している、という形で、製品の変遷もある。また、陶板やタイルの製造が増えてきているため、建築関係の方に進んでいく傾向があるが、その一例として、滋賀県立甲南高校信楽分校窯業科・デザイン科などで、次代の『信楽焼』を担う人達が育成されている。

でも、信楽は焼き物ばかりでなく、さらに一二〇〇年の昔、嵯峨天皇の御代が岩谷山（現在の仙禅寺一円）に茶の実を植えられたのを起源に、茶もまた広がり、これが茶器や茶つぼを作るきっかけとなり、今や焼き物とお茶の香り漂う信楽、とも言われている。

以上、信楽町と『信楽焼』についての大まかな事柄を説明したのだが、もっと詳しい内容は、この特集記事をどうぞ…。


信楽伝統産業会館

四月一日に作られたが、その前は『窯業振興対策協議会』というのがあった。しかし、これは各町とその業界の連絡調整的な協議会だったので、信楽焼の振興を目的とした『信楽焼振興協議会』と改名して、本格的に活動を始めたのである。

もともと、信楽焼を振興させようとしたきっかけは、五十七年度の四月に、工業組合の方から町の方に、五百万円の寄附金が加わった。そこで、この五百万円をいかに有効に利用するかということになり、それなら信楽焼を全国に紹介し、売り出そうという案が出たので、新たに町が五百万円を加え、まず最初に、東京は新宿のえびすビルで、約一週間『リビングショー』を開催した。このリビングショーに、ガーデンセット、植木鉢のカバー、傘立て、電気の照明スタンド、スリッパラックといった生活に密着したものが展示された。また、リブングショーは新宿のえびすビルで、約一週間『リビングショー』を開催した。

そして、人材の養成であるが、これが、一番大事なことで、まず、皆が喜んで仕事ができる職場を作っていこうとすることが大事なのだが、信楽の場合は、それが十分できていないのである。さらに、技術者が必要なのである。その勉強のために高校からあるのだが、陶器作りは、めんどうだから、若い人はあまりしたがらないので、中高年齢の人が多くなっている。つまり、人材の養成より、いかにして人材を確保するかという方が問題なのである。

また、信楽では精薄児の開発も行っている。というのも、精神障害を持っている人にとって、土を使う仕事というのは、非常に良いことで、こういった施設が信楽の場合、5パーセント以上ある。町民全体が、精薄児を育てていこうという気持ちを持っているので、自然に精薄児も増えてきて、一面、福祉の町という状態になっている。

振興協議会が、いろいろ議論した中で、一度、傘立てのポスターを作成しようという話が出た。前から手掛けていたし、商品として売り出すと、売れるのではないかということで、作成したところ、実際に非常に良いものができ、従来の形と全く違ったものができた。

また、信楽のイメージがどんなものであるのか。昔でいうと、信楽焼の名物は火鉢か狸であるが、現在では植木鉢か狸になっている。信楽焼は、なんでも作れるので「これが信楽焼か」という製品がないので、どこに行っても、信楽のイメージは火鉢か狸か植木鉢なので、もっと「こんなものが作れるんだ」と広くPRして、信楽焼を認識してほしいということである。

そして、振興協議会が今後、どのような計画で信楽焼を振興させていくかは、まだ議論の最中で、いつ結果が出るか、どんな計画になるかは、まったくわからないが、これからも、信楽焼を振興させるべく、活動を続けていくということである。

☆　☆

伝統を今日まで

狸の元祖『狸庵』

信楽焼と言えば、狸の置物が有名である。我々は、その狸を最初に作り出した、百二十年の歴史を持つ陶器店『狸庵』を訪れた。

その昔、初代狸庵店主が、まだ京都で焼物の修業をしていた頃、窯出しの後、みんなですきやきをした。その残りを、狸が山から食べに来た。その姿がとてもかわいらしく、おもしろかったので、作ろうと思ったのがきっかけであった。

今日では、たくさんの狸の置物が、信楽で作られているが、この狸には「八相喜縁」と呼ばれる、八つの意味が、体の八ヶ所にそれぞれ含まれている。その意味は次の通りである。

笠…思いがけない悪事災難を避けるための物。

目…何事に対しても周りに気を配り、物事を正しく見つめること。

顔…広く交際し、お互いに愛想よく暮らし誠実に生きること。

徳利…与えられた食事に満足し、人徳を密かに身につけること。

腹…いつも落ち着いて物事に取り組むだけでなく、時には大きな決断をすること。

金袋…金銭は臨機応変に無駄なく使わねばならない。

尾…何事も終わりが肝心であるように、立派に身を立てることが、本当の幸福である。

初代の頃は、姿も一般的で、野性的な狸であったが、二代目（現在の狸庵店主）からは、女の狸や、ゴルフや釣りをしている狸など、バラエティーに富んだ愉快な物が増えてきた。また、狸だけでなく、茶器、花器なども作るようになった。

ここで、信楽焼全般について述べてみよう。まず、特徴であるが、他の焼物より、素朴さがあるということである。色も茶系統が多く、渋味があり、使えば使うほど、わび、さびが出てきて良くなる。また、どんな大きさの物も作れ多種多様である。

次に、作っていく上での重要点だが、狸ならば、愛敬のあるかわいらしい顔であること。大きい物は型を作った後、二つか三つに切って焼き、後で接着する。出来上がるのは、三十センチメートルぐらいの物なら十日、大人の背たけぐらいの物なら半年ほどかかる。また、茶器、花器などは、デザイン、色、形の三つが大切である。しかし、火の具合などで、一つ一つの色や形などが少しずつ違ってくるので、デザイン、色、形の三つが共に優れている完璧な物は、百のうち一つか二つしか出来ない。

信楽焼は、狸などの他に植木鉢、瓦、タイルと、色色な物が作られている。そして、瓦、タイルなどの建築資材などの方が、美術品より後断者が多い。理由は建築資材などは、狸や茶器、花器を作るほど技術もいらず、大量に生産、販売できる。反対に美術品の工芸師になるには、十年くらいの修業が必要で、工芸師になるための試験のようなものがある。その上、地味な仕事なので、若い人はやりたがらないのである。

店先は狸だらけ

次に、信楽焼と町の関係であるが、信楽焼は六大土窯に入るほど有名で素晴らしい焼物である。そして、町の約90％は焼物を行っているので、当然町の収入は、信楽焼に支えられている。

しかし、信楽は、交通の便が悪いことや、山奥であるということなどから、他の焼物の町ほど発展していないのは、残念なことである。

○狸庵紹介

我々が訪れた『狸庵』は先にも書いたように、百二十年の歴史を持つ、老舗である。

店の商品はほとんどが、美術品を目的に、丁寧に作られている。店の裏に、三部屋ほどの仕事場があり、各部屋に一人か二人という少人数での手仕事であった。

重油、灯油、ガス、電気の各窯があり、外には、大きな作りかけの狸などが乾かされていた。また、店の横には、狸庵のトレードマークでもある、体長6メートル、重さ6トン、製作日数約一年半のジャンボ狸が、庭には狸の七福神が飾ってあるところなど、さすが狸の本家と思われた。

町の発展望む
信楽町町役場

我々は、信楽焼が町の発展にどのように関わっているのかを知るために、信楽町町役場観光課を訪ねた。

周りを山々に囲まれた、人口一万三千六百六十六人の信楽町は、今から千二百年前に、聖武天皇が紫香楽宮を造営された由緒ある町である。その時に、焼かれた瓦が信楽焼の始まりといわれている。このように、信楽焼の歴史は古く、信楽焼の他にこれといった産業のない信楽町にとって信楽焼は重要な収入源なのである。信楽焼は昔から、狸の置き物などの他に、火鉢を作っていたが、新しい暖房器具の出現によって、火鉢はすたれて行ってしまった。そのかわり、信楽の土は何でも作ることが出来るので、あの商品がダメならこの商品へと転換することが出来る。戦後、火鉢がすたれてきた時も、植木鉢や建築用タイルへと移って行き、現在も作り続けている。しかし、このような火鉢やタイルは、極一部の企業が大量生産をしているだけで、あとは従業員数十人未満の零細企業が、昔ながらの伝統工芸品を小量生産している。町としては、信楽焼を、

一、大量生産
二、建築用資材
三、手仕事、手作り

という三つの分野にわけて町の経済を成り立たせるために、ある程度量産させて、かつ手作りの伝統的な要素も残して行こうとしている。

こうなると、気になるのは後継者問題であるが、現在のところは若い人が、後継者として多く残っている。しかし、信楽焼は、技術のいる仕事なので、ある低度の修業をつまなければならない。そのために、県立窯業試験場に研修生として窯元から派遣されて、一年間勉強する制度などがある。以前は、信楽高等学校という工業高校で窯業の後継者の育成をしていたが、卒業すると皆、県外へ就職してしまうという有様だった。それでは意味がないというので普通科にして、その中に窯業科とデザイン科を作ることになった。現在は、この高校からも若い後継者が育ち、どんどん信楽町に残っている。

しかし、信楽焼を継いで行く人が増えていく一方で、信楽焼は新しい局面を迎えている。それは、以前のように何でも作れば売れるという時代ではなくなったのだ。いつまでも狸や植木鉢ばかりに頼っていては、信楽町の発展は望めない。そのために、町役場は、〝信楽焼振興協議会〟という町長が会長をしておられる協議会を作って、これからの信楽焼の振興策を検討している。信楽焼の特徴を生かした新製品の開発の他に、流通の面や、作った製品の販売方法などを話し合っている。

商工観光課長奥田さん

信楽町はこのような信楽焼の問題の他に、二つの問題を抱えている。一つは赤字ローカル線である信楽線を、いかにして存続させていくかということである。廃線にしないためには、一日二千人以上乗らないといけないので、〝乗って残そう信楽線〟を合い言葉に、住民が一致協力している。町役場の方も信楽町内だけでなく、甲賀郡内の各所や滋賀県官庁にも呼びかけている。キャンペーンとしては、町長が会長をしておられる〝信楽線を守る会〟という会が先頭に立って行っている。こういった住民の協力や町長さんの活躍によって、今の所は二千人以上越えているので信楽線は大丈夫なようである。

そしてもう一つは、町の整備である。山奥で、交通の便が悪い信楽町ではあるが、年間四十一万四千九百人程度の観光客がやってくる。しかし、多くの観光客が来るにもかかわらず、旅館や食堂などの設備が整っていないために、不愉快な思いをさせてしまう。町役場の考えは、信楽町をよくある俗化された観光地にしたくはなくて、それよりも先に町民が住みよい町と思えるような町作りをしていきたいそうである。そこまでいくにはまだまだ時間がかかりそうだが、まずは信楽町に、信楽焼の陶器を生かしていこうとしている。具体的な内容は、町を散策しながら陶器が見られるコースや、歩道にタイルを敷き詰めるなど色々な計画を立てている。

昔から陶器の町として栄えてきた信楽町ではあるが全国的に見ると、まだまだ知名度が薄い。〝これが信楽焼〟といえるような陶器を作ることが、今後の課題といえるだろう。

新製品を報道
甲賀新聞社

我々は、信楽焼がどのように報道されているのかを知るために、甲賀新聞社を訪れた。

信楽焼は、新聞社の創立（昭和三十三年）と同時に報道に使われ始めた。その頃からずっと〝新製品の宣伝〟を中心に報道されている。

信楽町では、観光客獲得のため最近〝陶芸教室〟が増えている。ここでは、だれでも焼き物を作ることが出来るので、観光客を始め、多くの人達が訪れている。その他、観光業者も色々な宣伝をしているそうである。

また、信楽焼の販売については、大阪や京都などの大都市の業者と手を結んでいるので、現在はスムーズに行われているらしい。その他、全国各地の建築材料店、土産物店とも手を結び、信楽焼の発展と、売り上げの増加に努めているそうである。

ところで信楽焼は、〝小さなものから大きなものまで、何でも作れる〟という長所があるので、それを活かして最近では、陶器で出来たタイルを敷き詰めた〝陶器橋〟や〝陶器公園〟などが作られている。また、新製品として〝かさ立て〟や〝スリッパラック〟なども販売されている。

一方、後継者問題も起こっている。信楽焼は火の具合などによって微妙に焼き上がりが変わる。それで、色、形、デザインの三つが完璧に揃った作品は、仮に百個の壺を作ってもそのうちのたった一個か二個位しかないらしい。そのため、後継者の育成はかなり重要視されているそうである。

さて、信楽焼についての今後の問題であるが、だんだんと信楽焼の原料となる〝土〟が減って来ているらしい。現在は、三重県から購入しているが、将来は中国の良質の土が欲しいそうだ。それで何とか中国と手を結びたいのだが、輸送料が高くつくことや、その他様々な問題があり、実現は難しいらしい。

次に甲賀新聞社の報道の方法についてだが、〝甲賀新聞〟の販売地域は甲賀郡一帯だけである。それで、報道の中心は〝新製品の宣伝〟である。色々な宣伝をすることによって、町が活気づいてきたそうだ。

新製品の誕生については〝信楽が発展するのに、とても重要なことである。これからも人目をひくような製品を作ることが大切。〟というのが、新聞社の考えである。

ところで、信楽町の中心である町役場の方針についてだが、これはほとんど報道していないらしい。しかし〝信楽商業協同組合〟〝信楽工業組合〟とタイアップして、様々な話し合いをしているので、情報は十分入ってくるらしい。また、各種の観光業者から〝新製品の宣伝をして欲しい〟〝催し物の案内をして欲しい〟などの報道依頼が次々と入るので、取材には困らないそうである。

それから、信楽焼のこれからの改善策は〝いかにして、人（観光客を含む）に喜ばれるものを作るか〟ということである、と新聞社は考えている。

甲賀新聞社は、〝信楽焼を発展させるためには、新製品をどんどん開発すること〟という方針を元に、これからも取材・報道を続けていくそうである。

発展不可能？
町の改善が先決

信楽焼住民の協力で信楽焼を沢山の人に知ってもらおうと、チラシ配りなどのキャンペーンも行っている。我々の取材中にも、〝信楽陶器祭〟と呼ばれる陶器の祭りがあり、町でも住民総出で観光客の確保・接待と活気づいていた。

だが、信楽焼ばかりに力を入れていていいものであろうか。信楽町では、後継者問題にも取り組み、都会への就職難も手伝って、若い人達が信楽町に徐々に残って陶芸家を目指している。このままでは、信楽焼ばかりが町にあふれてしまう。信楽焼の売り上げの半分はやはり観光客の買い物である。ということは、観光客を増やさなければ、信楽焼は衰退の道をたどるであろう。〝交通の便が悪い〟〝観光施設がない〟〝多人数の宿泊施設が少ない〟〝町に活気がない〟などの点で、信楽町は観光客が来にくい。これでは到底信楽焼の発展は望めないであろう。〝信楽焼を大きく宣伝する〟〝観光施設を多く作る〟〝町を活気のあるものにする〟などに力を入れるべきである。こうすることによって、観光客も増え、信楽焼も発展するはずである。

信楽焼は、〝素朴さ〟〝泥くさ〟〝土の色を活かした赤褐色〟などが人々に好まれている。だが、現在では素朴さが完全に失われた形の複雑なものや、鮮やかな色のものが多く並んでいる。それに〝かさ立て〟〝スリッパ立て〟などの陶器であって陶器らしくないものが多く作られ、広く宣伝されている。これらは、信楽焼を伝統工芸ではない通俗化したものにしようとしている。〝伝統工芸信楽焼〟が軽くみられているようである。昔から伝わる〝伝統〟を重視して、人々の認める信楽焼を作っていってもらいたい。

☆　☆　☆

素朴な味わい
観光客インタビュー

我々は、新聞部は、観光客から見た信楽焼は、どのようなものかを知るため、信楽伝統産業会館を中心として、観光客に、インタビューを行った。

まず、信楽に来ての感想は、〝焼き物の店が多い〟〝狸の焼き物が多い〟の類が大半であった。他には〝素朴〟〝町に活気がない〟などである。

次に、信楽焼を見ての感想はというと、〝素朴で良い〟〝渋い〟〝落ち着きがある〟というのが圧倒的に多かった。また少数意見として〝東洋人の心である〟〝狸が多い〟などもあった。このようにほとんどの人が信楽焼を絶賛しているようであるが、中には、〝もっと信楽焼の特色を出して欲しい〟〝狸はもっと素朴な方がいい〟（狸の中には、リボンを付けたものや、芸者の格好をしたものがある）という意見もあった。

ところで、信楽焼は現在、茶碗などの日用品や、タイルなどの建築材料の大量生産を行っているが、それに対してどう思うかと聞いてみた。すると我々の予想とは逆に、〝素晴らしい〟〝もっと大量生産を行って欲しい〟〝生活のためなので良い〟などの賛成意見がほとんどであった。

それでは一体、本当の伝統工芸とは何であるのかを答えてもらった。

一番多かったのは、〝昔の良さを残していくこと〟〝手作りを続けていくこと〟〝昔からの手法を大事にしながら生活に密着したものを作っていくこと〟〝昔から伝えられてきたもの〟など伝統維持の意見だった。

もちろん、〝手作りと大量生産を両立させていくこと〟〝新しい物を作っていく中で古くからの伝統を残していくこと〟などの両立派もみられた。しかし昔からの伝統を残していく、という考えは、どちらも持っているようである。

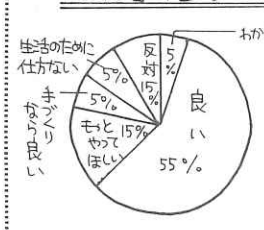
そして最後に、信楽焼に期待することを聞いてみた。

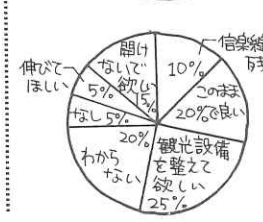
やはり多かったのは、〝伝統を残していって欲しい〟という意見であった。他には、〝もっと焼き物の種類を増やして欲しい〟〝実用的な物を作って欲しい〟という現実的な物もあった。

全体的に見て、観光客の求めている信楽焼というのは、壺、狸、などの古くから伝えられてきた手作りの物のようだ。

今のところ観光客の信楽焼への欲求は満たされているようであるが、それがずっと続いて欲しいものだ。

観光客インタビュー





町を観光地に
住民インタビュー

〝住民の期待する、これからの信楽の町と焼き物〟ということをテーマにして、我々は信楽町の住民にインタビューをしてみた。

まず、昔に比べて現在、町がどのように変わってきたかを聞いてみた。すると焼き物については、火鉢などが主流だったのが、現在は植木鉢や庭園セットになったということだ。そして町については、道が広くなったり、店が増えたりして観光客が増え、町全体に活気が出てきたと多数の人が答えた。

次に、信楽焼の魅力を聞いてみた。この質問には、皆それぞれの意見であったが、大体の人が土を求めていた。きめが荒いとか、泥くさい、渋い色味などといったものであった。他には、伝統・重み・他の焼き物に比べて大きいなどであった。

信楽焼の所有については、工場で作っている物は大体持っているが、伝統的な手作りの物を持っている人は少なかった。

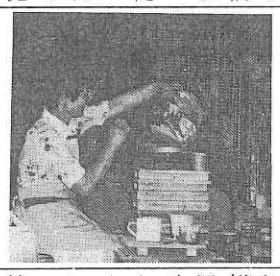
そして、信楽焼を実際に作ったことがあるか聞いてみると、ほとんどの人が一度は作っており、家で焼いている所も結構あった。

次の質問は、なぜ後継者が減っているか。多かったのは「お金にならないから」とか「技術がいるから」という答えであった。しかし若い人が、今たくさん勉強しているので「減ってるとは思わない」と答える人も少しいた。

また、住民が焼き物に期待することは、新しい感覚に伝統を残し、土を活かした物を作って欲しいということだった。町に対してはもっと観光客が来るように発達して欲しいという人が多数で、全体に住民の、町や焼き物に対する期待は、とても大きかった。

町に対する期待に関連して、観光客はどうすれば、もっと増えるかを最後に聞いてみた。すると「宣伝すれば良い」と答える人が圧倒的であった。他には「交通を良くする」とか「遊園地やレジャー施設を作る」とか、観光客に対する受け入れ態勢を積極的に作るということだった。

信楽町の住民は、何代も前から住んでいる人が多く、温い人ばかりだった。


すべて手作りです！

徹底解剖！阿倍高

新聞部の座談会

我々新聞部では、阿倍野高校について座談会を開いた。新聞部部員から見て、阿倍高のいい面・悪い面を考えてみた。

司会　校舎改築が始まり、もうすぐ現在の校舎も姿を消しますが、現在の校舎をどう思いますか。

—狭い。

—汚い。

—壁が落ちる。床が割れる。

—早く建て直して欲しい。私達が新校舎に入れないから。

—ロッカーの配置が悪いと思う。廊下に並べてると、外に取りに行くのがじゃまくさいし、特に冬は、教室から出るのが寒い。ロッカーを教室に入れてしまえばいいのに。

—もったいない建て方してると思う。中庭ってのがあるのに、私達が使えない。

—あそこでお弁当食べれるようにして欲しい。

—机が嫌い。座りにくいから。

—スカートがしわくちゃになってしまう。

—それに地震のときも、机の下に避難できない。

—後ろを向けない。

—暗い。入学した時、おばけ屋敷かと思った。

—暗いし、ぼろいけどなんとなく情緒があると思う。

—歴史・伝統を感じる。

—古いだけやと思う。

—でも、一年もおったら暖か味を感じるようになった。

司会　阿倍高の先生についてはどう思いますか。

—年をとった先生が多いと思う。やっぱり若い先生がいい。

—でも、古い考えを持った若い先生はいや。

—今は昔の伝統のある阿倍高でないから、それに固執しないで欲しい。教え方をもっと変えて欲しい。

—暖か味のある先生が多いと思へん？

—おとなしい先生が多い。

—あんまし恐れへんと思う。

—授業もよくわかる先生が多いと思う。

—わからん先生もおるけど。

—人気のある先生が多い方がいい。

—からかいがいのある先生が多いとうれしいのに。

司会　阿倍高の生徒についてはどう思いますか。

—おとなしい。なんかみんな神経が寝てる！

—外へ出たら変身する子ばっかし！

—やっぱりよく言われる無気力かな？

—H・Rで何かを決める時に、誰も発言しなくていつまでも長くかかってしまう。

—役員の選挙でもくじ引きで決めるのもおかしいと思う。

—クラスでも内輪だけでキャーキャー騒いでるけど、本当に大事なところでは借りてきた猫みたいに黙ってる。

—みんなを引っ張っていくアイドル的存在の子がいないからじゃないのかな？

—だから全然盛り上がらないんだ。

—クラブに入ってない子はあかんと思う。なんか貧弱そうやわ。

—クラブに入ってない子で、なんにも目的のない子はいや。

—なんだか女の子の方が青春してるみたい。

—うん。応援団でも女の子が中心みたい。

—女の子が悪そうな子が多い。

—女の子は頭が良すぎると思う。

—女の子って勉強も運動もなんでもできてスタイルいい子が多い。

—女の子が強いのはおもしろくない。

—阿倍野ってお嬢さんぽい子が多くて、みんなフワフワしてるからそんなことはないと思うけど。

—ここって女子高のことを引きずってる。

—入学する前に、『女の園』って聞いた。

—やっぱり男の子が引っ張ってかなきゃ、肝心な時にダメみたい。

司会　『文化祭』についてはどう思いますか。

—なんだかお客を無視して、内輪だけで盛り上がりすぎる。

—準備期間が短かすぎて十分に表現できてないと思う。

—模擬店は教室でやる方がいいと思う。

—案内が不足してる。

—案内状がおもしろくないのがいや。

—紹介状をもっときれいにして欲しい。

—あんまり良かったのがなかった。

—呼び込みだけが派手だった。

—旧講堂でするのはやめて欲しい。あそこ暗いから。

—先生が全然出てこない。もっと一緒に、生徒のお祭りに参加して欲しい。

—一緒に呼び込みするとか、先生も何か出し物するとかやって欲しい。

—後夜祭での『オクラホマミキサー』をしたかった。せっかく練習したのに。

—ファイヤーが小さかった。

—でも、自動的に火がついたのには感動した。

—でも、グランドがいっぱい余ってもったいなかった。

—全体的に盛り上がれへん文化祭やったね。

皆さんも一度阿倍高をゆっくり考えてみて下さい。

慣例化が必要

必修クラブ調査

必修クラブは、昭和四十八年から行われている。必修クラブが誕生した理由は、二つある。一つは、部活動は、体力・能力・技術などが優れた生徒だけでないとついていけないという現実のためだ。一度やってみたいと考えているような一般生徒は、簡単に部活動に参加できない。そこで、誰でもが参加できるようなクラブがあると考えられた。また、部活動に、参加していない人は、先輩・後輩という関係が出来にくい。しかし、必修クラブがあるとそういうことはなくなる。

これらのような理由で始まった必修クラブを、本校では、まず、先生方への調査から始める。どの先生がどのようなことを指導出来るかを調査するのだ。それで、クラブの種類が決まると、次に、指導に可能な人数、施設に収容出来る人数などを検討し、人数が決定される。

学校側の決定事項に従い、次に生徒に希望調査を行なう。これで、生徒が振り分けられ、必修クラブが実施となる。

必修クラブの実施されるまでの過程は、わかってもらえただろう。しかし、阿倍高では、一学期の間、ほとんど、必修クラブは実施されていない。

一学期には、色々とクラスで決定することや、行事が多い。クラス役員や、体育大会・文化祭のための話し合いをホーム・ルームの時間と並行して必修クラブの時間を使う。また、講演会などの行事にも割当てられる。

また、学校には、先生方で組織されている「必修クラブ委員会」がある。これは、必修クラブの準備、実施などを総まとめするところで、各クラブへの予算編成などを行う。この委員会のメンバーが、人事異動とともに構成が変わる。それで、必修クラブの準備が全く一からになってしまう場合も起こりうるのだ。

それと、先にも述べたように、先生への調査が必要である。これを、きちんと整理するのにかなりの日数を要する。

そして、現在、校舎改築中であることが関係している。工事で、グラウンドが充分に使用出来ず、運動系のクラブに、色々と不安がある。場所がないため第二グラウンドで一度に様々な運動クラブが活動するため事故の心配があるのだ。これは、昨年にも言えた。いつから工事が開始されるかわからなかったのだ。

これらのような理由で、二学期に入ってもまだ必修クラブの意義は、充分に満たされていない。にも関らず、一向に、必修クラブの実施方法に改善が見られないのは、やはり、校舎改築中ということや、場所・施設の不足ということがあるからだ。

しかし、学校側も、これらの現状に全く不満がない訳ではない。必修クラブの時間数が少な過ぎて、やりたいことの半分も出来ないという声もある。毎年、中端半端に終わってしまうのだ。一部では、必修クラブ自体に不満がある。自主的な参加ではなく、強制されての参加であるため、生徒が積極的でないというのだ。

学校側としては、一時限でも多くの必修クラブの時間を持ちたいと考えている。しかし、必修クラブの種類が、毎年毎年同じではないということや人事異動による先生方の出入りなどで、必修クラブが慣例化していないため、一学期当初からの実施は難しいと見ている。

しかし、学校側では、生徒側の盛り上がりしだいでは、いくらかは早く必修クラブが行われる可能性があると言っている。

最後に今年の予定を述べておく。既に、先生方への調査は済まされている。今は、種類の決定や人数制限が行われている。しかし必修クラブは二年生が中心のため、修学旅行が終わり、中間テスト後（十一月中）に文化祭後の希望調査をもとに、各クラブに生徒を振り分け実施する予定だ。

☆　☆　☆

野外雑学

京の都を訪ねて

秋の南禅寺コース

今回の野外雑学では、取材先を決めずに行った。行き先を京都方面としておいて、京都駅に着いてから取材先を決めることにした。

大阪駅から新快速で約四十分、京都駅に着く。電車賃は六百二十円。改札口を出ると、真横に京都の観光マップがある。京都全体に観光地が広がっている。その中から、南禅寺→京都市動物園→新京極観光コースを考える。駅前に『京都市観光案内所』がある。ここでは、観光場所の案内や行き方をくわしく教えてくれる。

京都駅からバスに揺られること約三十五分、法勝寺町に着く。バス代は百五十円。南禅寺前の通りでは、南禅寺名物の精進料理の店が立ち並んでいる。驚いたのは、『寝衣にて立入りお断り』という看板が立てられていたことだ。南禅寺は正面の山までの敷地が広い寺であるが、残念なことに道がアスファルトである。南禅寺で最も由緒のある寺院は、『天授庵』である。本堂の中央には開山大明国師の等身大の木像が安置されている。庭園は日本独得の枯山水で、何ともいえない雰囲気をかもしだしている。石畳白砂、緑苔…。日本人の〝心〟を感じさせる。そのせいか、外人の観光客も数多い。『天授庵』の他にもたくさんの古美術や歴史人の墓などが南禅寺にはある。

（南禅寺　入場料無料。
天授庵　大人三百円。
学生二百円、小人百円）
南禅寺からゆっくり歩いて十五分。京都市動物園着。大勢の家族連れで賑わっている。アシカ・ゾウ・カンガルー・ツル・タヌキ、どことなく誰かに似ているものばかり!?京都市動物園は、私達のおなじみの天王寺動物園と比べると動物の種類も多く、かなり広い。ハムスターやヤギ、ニワトリなどの小動物を入れた小動物園の園内にあり、そこに入って動物に触れることが出来る所もある。

（入場料　大人三百円。
月曜日休園）

動物園から一番近い、市電の蹴上という駅から、数分で三条に着く。お土産を探すにもってこいの新京極では、京名物〝おたべ〟を売る店や、色々な土産物を売る店がたくさんある。また、喫茶店、洋品店なども京都らしい上品な感じの店が多いのには、感心した。

帰りは、三条から京阪電鉄で、右手に鴨川をながめながらの帰阪であった。時間は約三十分、電車賃は、三百十円で淀屋橋に着いた。

すっかり秋を感じさせる今日この頃。時にはこんなミニ旅もいいものである。

APC通信

☆研修旅行こぼれ話

我々、新聞部は今号の特集である「信楽」へ、七月二十五～二十八日まで、研修旅行に行った。

信楽は、電車に約二時間乗り、その後、バスで一時間ほどかかる田舎である。バスは、狭い道路を左右に激しく揺れて走るので、第一日目から疲れてしまった。

また、民宿がかなり町から離れた所にあったため、町に下りるだけで、三十分近くかかった。その上、住民と観光客インタビューの時は、ひたすら暑い中を歩かなければならなかった。しかし、丁寧に答えて下さり、住民の中には飲み物を出して下さる人もいた。

また、別の取材では取材場所が山にある上、道順がよく分からないために二時間近く歩き回ったなど、様々な事があった。

しかし、夜には疲れを忘れて、花火大会や肝試しをしたり、遅くまで雑談をしたりして楽しんだ。

去年は熱を出した者が何人かいたが、今年はケガをする者もなく、無事、研修旅行を終えることができた。

☆校舎改築情報

現在、工事の進み具合は、三階部分までのコンクリート打設が済んだところだが、工事全体から見ると、35％の出来高だそうだ。

これからの予定は、十月中に、四、五階のコンクリート打設を強行し、次に内装工事を行うそうだ。また同窓会館から体育館東門にかけての、塀及びよう壁の改修工事を強行するそうだ。

工事は、来年二月の竣工を目指して順調に進渉しているようである。

☆体育大会結果報告

去る、九月三十日に、第三十七回体育大会が行われた。大会の結果は次の通りである。

優勝（玄武）……一一八五点
準優勝（青龍）……一一四二点
三位（朱雀）……一〇一五点
四位（白虎）……九九八点

あいろにー

編集後記

二学期が始まって、早一カ月が過ぎ、いよいよ今日は、文化祭です。

体育祭と並んで、華やかな行事である文化祭。各クラス・各クラブとも出し物の準備で忙しかったことでしょう。特に今回は、新しくバザーができることになり一味違った文化祭になると思います。それぞれの持ち味を生かして、楽しいものにして行って下さい。

ところで、今回の新聞はいかがでしたか。我々は信楽町があまり発達していない事に驚きながらも、住民の皆さんの暖かい協力のおかげで取材もスムーズに運びました。現在、三―六・三―七の教室で、信楽焼に関する取材結果を展示しております。皆さん、ぜひ見に来て下さい。